Reed
Man is a Thinking Reed.
KANSAI UNIVERSITY NEWSLETTER
No.35
November, 2013
関西大学ニューズレター
発行日：2013年(平成25年)11月25日
発 行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 ／ TEL.06-6368-1121
http://www.kansai-u.ac.jp/

◉ 関西大学第一高等学校・第一中学校が創立100周年

# 心豊かな個性を育てる人間教育の伝統と未来

## 「考動」するリーダーを育成する教育を探求

■鼎談　川崎 亨　株式会社ロイヤルホテル 代表取締役社長
池内 啓三　学校法人関西大学 理事長
橋本 定樹　関西大学第一高等学校・関西大学第一中学校 校長

■リーダーズ・ナウ —5
在学生— 高等部3年B組有志
卒業生— ジャズトランペット奏者 横尾 昌二郎 さん

■研究最前線
算数科教育の研究
子どもの知識と方略を引き出す具体物 —7
文学部 — 石井 康博 教授

バイオマスの有効利用の研究
農工商が連携する新しい六次産業を創出 —9
化学生命工学部 生命・生物工学科 — 片倉 啓雄 教授

■トピックス［学内情報］—11
関西大学第一高等学校・第一中学校100周年記念式典・祝賀会挙行
次なる時代に向けて躍進する

大阪教育大学、近畿大学と連絡協議会を発足
国私立の垣根を越えた連合教職大学院設置に向けて

本学が申請した経営・研究戦略に基づく4件のプロジェクトが
文部科学省平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択

第36回関西大学統一学園祭を開催
「Jump out! 関彩大!!」

■社会貢献・連携事業／地域連携 —13
第4回Japan Weekを開催
EU諸国とともに日本のメディア文化を考える

第1回国際交流フェスティバル「せんぱく」を開催
多文化・多世代共存で、北摂地域を活性化する

大規模避難訓練を今年も実施
関大防災Day2013 —広がれ！みんなの安全・安心！—

関西大学協賛の「第3回大阪マラソン2013」開催
関大生のボランティアが活躍

■関大ニュース —15
大学生観光まちづくりコンテスト2013
商学部の石﨑和希さんがパフォーマンス特別賞受賞 ほか

■鼎談

◉関西大学第一高等学校・第一中学校が創立100周年

# 心豊かな個性を育てる人間教育の伝統と未来

## 「考動」するリーダーを育成する教育を探求

**川崎 亨** • 株式会社ロイヤルホテル 代表取締役社長
**池内 啓三** • 学校法人関西大学 理事長
**橋本 定樹** • 関西大学第一高等学校・関西大学第一中学校 校長

1913年、関西甲種商業学校として開校した関西大学第一高等学校・第一中学校(以下、一高・一中)が、2013年11月2日、創立100周年の節目を迎えた。関西大学併設校として「知育・徳育・体育の高度に調和した人間教育をめざす」ことを教育目標に、多くの有為な人材を送り出してきた。1世紀の歴史を経てもなお、「考動」するリーダーを育成する新たな教育のあり方を探求し続けている。実業界で活躍する卒業生・川崎亨ロイヤルホテル社長、池内啓三理事長、橋本定樹校長が、同校の過去・現在・未来について語り合った。

### ◆良き伝統は守りつつ弛まぬ改革

**川崎**　現在の一高・一中ではどのような教育をされているのでしょう？

**橋本**　教育方針である「正義を重んじ誠実を貫く教育」を推進し、「知育・徳育・体育の高度に調和した人間教育をめざす」ことを追求していくという基本的な姿勢はずっと変わっていません。その上で、これまで守ってきた良い伝統を大切にしながら、新しいものを取り入れるようにしています。英語は、現在も特に力を入れている教科です。英語検定を中学校では毎年、高校では3年間で2回、全生徒に受験させています。高校ではTOEFL-iBTにも挑戦しています。

また、進学校の中には7時間目、8時間目まで授業をする学校が多くなっていますが、それに追随せず、これまで通り、授業は6時間目までとし、放課後の2時間は課外活動の時間として確保しています。友達同士、先輩後輩の付き合いなど、人間関係を鍛える場としては、課外活動が一番良いですから。部活動には中学生はほぼ全員、高校生は約9割の生徒が参加しています。部活動に所属していない生徒も、多くはバレエや音楽など校外の活動をしています。夕方までに授業が終わって、勉強との両立ができるということは、子供達が本校を志望する理由の1つになっています。

併設校は大学につながっていることで、いわゆる受験対策偏重ではないという環境があります。そのことによるゆとりを、生徒には自分の人生の大切な時間ととらえて、積極的に充実した学園生活を過ごしてほしいと思っています。

### ◆グレーの制服が緑の中を。硬派な男子校

**川崎**　一高・一中の校内に入るのは卒業以来45年ぶりです。まだ一中の生徒だった時に、一高の先輩で太平洋単独横断を果たした海洋冒険家の堀江謙一さんの講演を、屋外講堂で聴いたのを思い出しました。

**橋本**　屋外講堂は現在の100周年プールがある場所に建っていたはずです。久しぶりにご訪問いただいた本校の印象はいかがですか？

**川崎**　奇麗になっていて、驚きました。昔は建物も少なく、周囲には緑が多く、その中をチャコールグレーの制服を着た男子生徒の一団が歩いて来るという風景がありました。

私は軟式テニス部でしたが、練習が非常に厳しく、とにかく走ってばかり。授業が終わった途端にコートまで走って行かなければ怒られるたいへん硬派な部でした。私が入学した当時は正門入口のところに奇麗なテニスコートがあって、その横で日本拳法部が稽古をしていました。当時から拳法部は強かったですね。それから、ヨット部も強かった。部員は少なかったけれど、国体の常連でした。運動部はどこも校地の起伏を利用してトレーニングをしていました。スポーツが盛んで硬派、本当にそういう雰囲気が私には居心地が良かったですね。

**池内**　勉学の方はいかがでしたか？

**川崎**　私が英語をすごく好きになったのは中学の先生のおかげです。今でもありがたいと思っています。詰め込みの暗記ではなく、英語の歌を聴かせてくれたり、教え方が変わっていました。出会いが楽しかったおかげで、英語が好きになれたのだと思います。

### ◆併設校３校で切磋琢磨し、教育の質の向上を

**池内**　硬派な学生時代を過ごされた川崎社長からすると、一高・一中の男女共学化は、大変な驚きだったのではないですか？

**川崎**　その通りです。男女共学になったのはいつからですか？

**橋本**　1995年に中学に女子が初めて入学し、高校は1998年からです。私が本校で教えるようになった1981年には、まだ男子校らしいバンカラな雰囲気が溢れていましたが、男女共学になって学校はやはり大きく変わりました。

**川崎**　一高・一中の歴史の中で、男女共学化以外に大きな変化というと、何が挙げられるのでしょうか。

**池内**　一高・一中だけの話ではありませんが、学校法人としては2008年に北陽高等学校を併設校とし、2010年に高槻ミューズキャンパスに初等部から高等部までを、北陽キャンパスに北陽中学校を開校し、一高・一中と合わせて併設校を3つにしたということが挙げられます。

**川崎**　一高・一中にとっては、併設校が増えることは何か影響がありましたか。

**橋本**　心理的な影響が大きいと思います。兄弟校ができ、お兄さんとしてしっかりしなければいけないという意識が芽生えたように思います。

**池内**　他の2校は、一高・一中に追いつけ追い越せでやっていますからね。3校の校長先生には、私からそれぞれの特長を出して競争しながら高めあっていただきたいとお願いしています。

エスカレータ式で大学まで進学して苦労知らず、という見方をされることもありますが、中高大一貫教育には良いところがあり、意義があると私は思っています。（川崎）

高等部は「安全科学科」という進学型の専門教育をしていて、1万2000字の卒業論文を仕上げるプロジェクト科目を設けています。この科目では自分で課題を見つけ、調査・分析を行い、自ら考え行動する力を伸ばします。この卒業論文が「本当に高校生が書いたのか？」と思うくらいよく書けていて、大学の教員の評価も非常に高くなっています。

北陽高等学校には、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を取ることにトライしてみませんか、と相談しているところです。

さて、では一高は何を目指すのか。英語教育に特化するのも良いでしょう。あるいは、国際バカロレア資格を取る教育課程を作るぐらいの思い切った挑戦をしたほうがよいと私は思っています。1学年10クラスあるうちの1、2クラスでいいから、一高にしかない教育の特長を打ち出してほしいですね。

併設校にはしっかりした考え方と、高い学習意欲を持った生徒を育てていただき、その生徒達に関西大学の中核を担うリーダー的存在になってもらうことが理想だと私は思っています。併設校から大学への入学条件は教授会が決めることですが、校長先生の推薦があれば全員大学に入学させても良いのではないか。そのためには、大学生たるにふさわしい学力を備えた人材を育てて、自信を持って送り出す。この信頼関係を大学と併設校との間でしっかりと築くことができれば、学校長の推薦制度を導入できるのではないでしょうか。

また、理事長としての本音を申し上げると、高い学力を持った併設校の生徒が他大学に進むことは残念であると思っています。医学部など関西大学に無い学部はやむを得ないですが、併設校で育った優秀な生徒には、関西大学をしっかり支えてほしいと考えています。

## ◆豊かな感動体験が個性を磨く

**川崎**　現在の一高・一中はどのような生徒が多いのですか？

**橋本**　一人一人非常に個性ある生徒が集まっていると思います。自分の良いところを伸ばしたい、それにふさわしい場所だと思って、本校を選択した生徒が多いという感じがします。みんな「学校が楽しい」と言っています。明るく青春を謳歌している生徒が多いともいえるでしょう。

**川崎**　中学、高校で多くの感動体験を得た人は、社会に出るとより魅力のある人物になるような気がします。エスカレータ式で大学まで進学して苦労知らず、という見方をされることもありますが、中高大一貫教育には良いところがあり、意義があると私は思っています。

**橋本**　今、社会から求められているのは、コミュニケーション能力ではないでしょうか。集団の中で、周りを観察し、自分の役割を理解し、リードしていけるような人物です。そういった人物を育てるために勉強と課外活動をバランスよく実践し、多くの感動体験ができるようにサポートしていきたい。勉強もするがやりたいことにも打ち込んで、そして大学に行く。それが実践できる場所としての一高の良さを守っていきたいと考えています。教員にはとにかく生徒の「こういう体験がしたい」「こういうことを学びたい」という要求には可能な限り応えていきましょうと伝えています。

## ◆身近な先輩の存在が、良い刺激に

**池内**　せっかく大学がすぐそばにあるわけですから、大学と高校が今以上に緊密な関係を築けば、学習・課外活動・学校生活などあらゆる面において、生徒の力をもっと伸ばすことができるだろうと思っています。大学の授業を中学生や高校生が体験できるような交流ももっと盛んにできるでしょう。高大連携を多面的にもう一歩進めることを考えていきたいですね。

**橋本**　課外活動ではアメリカンフットボール部や陸上競技部などで、大学とのタイアップがうまくいっているようです。また、アイスホッケー部は以前はいろいろな場所を転々として練習していましたが、今ではアイスアリーナで週5回練習できるので、関西ナンバーワンチームになりました。

また、学習面でもすぐ近くに年齢の近い先輩がいることが生徒にはよい刺激になっています。学年が上がる中で、勉強する意欲をなくしてしまう生徒がいます。そのような生徒のモチベーションをいかに引き上げていくか。中学生に将来の仕事を考えさせることは難しいですが、先輩の大学生や社会人の卒業生を招いて、自身が中学・高校ではどうしていたかといったことを話してもらうと、中学生も熱心に耳を傾けています。

## ◆中高大一貫だからできる教育がある

**川崎**　一高・一中の将来について、どんなビジョンをお持ちなのか、OBとして興味を持っています。

**橋本**　これからを考えると、全体的には良い伝統は大切にしながら、そこにキラリと光る何かがほしいと思っています。また、併設校3校が切磋琢磨し、交流も活発になるようにしていきたいと考えています。

**池内**　中高大一貫の10年間の教育は、特に多感な中学時代に、仮に子供達が不適応や問題を起こしてしまうことがあっても、しっかりとケアして時間をかけて立ち直りを見守ることができます。中学から大学生活まで視野に入れて一人一人の生徒に寄り添って全人的な教育を行うことができる。これは中高大一貫教育だからこその強みだといえます。10年間の教育は相当面白い人材が育てられると思っています。大学までの一貫教育を基軸に据え、中高大が連携し、生徒一人一人を大切にする教育を関西大学の売りにしたいと私は思っています。

教員にはとにかく生徒の「こういう体験がしたい」「こういうことを学びたい」という要求には可能な限り応えていきましょうと伝えています。（橋本）

**川崎**　私どものロイヤルホテルは老舗のホテルといわれていますが、ずっと古いままでいるというわけにはいきません。新しくして、それでいて古くからのお客さまにも満足してもらうようにしなければなりません。教育はビジネスと異なり、今までのやり方を変えることは大変ですが、変化を恐れず、大学も、一高・一中も新しいことに積極的にチャレンジしていただきたいと期待しています。

**橋本**　ありがとうございます。ところで、川崎社長と同様に久しぶりに訪ねた母校のあまりの変化に驚かれるOBはたくさんいらっしゃいます。そこで、100周年を記念して、11月8日に一高・一中の歴史を写真と解説文で紹介する「歴史的景観回顧モニュメント」を正門前に設置しました。1913年に福島学舎でスタートし、天六学舎を経て、1953年に千里山へ移転してきたことや、2004年に現在の正門に整備されたことなど、両校の歴史をたどることができるものになっています。

**池内**　他にもインターネット環境を整備し、全教室で42インチの大型液晶画面を使い、リモコンの操作で簡単に蓄積してある資料動画から必要なものを呼び出すなど、授業で活用しています。また、プールの建て替え、教室のリニューアルが、2013年の夏休み中に完了しました。

これらの整備のための資金の一部はOBの方々からの募金で賄われています。募金は1億円の目標額を掲げてお願いしましたところ、おかげさまで目標額を達成することができました。大変ありがたいことだと感謝しています。卒業生の方々の母校愛の強さを感じました。一高・一中100年の歴史の意義は、優れた見識をもった多くの人材を輩出してきたことにあると思います。学校の未来にその方々のご意見をできる限り反映していきたいと考えています。

中学から大学生活まで視野に入れて一人一人の生徒に寄り添って全人的な教育を行うことができる。これは中高大一貫教育だからこその強みだといえます。（池内）


**川崎 亨（かわさき とおる）**
1950年香川県生まれ。62年関西大学第一中学校入学、68年関西大学第一高等学校卒業。73年関西大学法学部を卒業し、株式会社ロイヤルホテル入社。2004年リーガロイヤルホテル大阪総支配人、08年リーガロイヤルホテル京都総支配人を経て、10年株式会社ロイヤルホテル代表取締役社長に就任。

**池内 啓三（いけうち けいぞう）**
1943年旧満州（中国東北部）生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員、96年総務局長、2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年学校法人関西大学専務理事。12年理事長に就任。

**橋本 定樹（はしもと さだき）**
1955年大阪府生まれ。74年大阪府立今宮高等学校卒業、78年大阪市立大学理学部地学科卒業。大阪府立西浦高等学校、明浄学院高等学校で地学を教える。81年関西大学第一高等学校・第一中学校に奉職。第一中学校教務主任、第一高等学校教頭、入試対策主任などを経て、2010年関西大学第一高等学校・第一中学校校長に就任。


▼関西大学第一高等学校・第一中学校の歩み

**1913**　［大正2年］4月
・関西甲種商業学校を福島学舎にて開校

①

**1929**　［昭和4年］9月
・関西甲種商業学校が福島学舎より天六学舎に移転

②

**1947**　［昭和22年］4月
・関西大学第一中学校開校

［昭和20年］8月 終戦

③

**1948**　［昭和23年］4月
・関西大学附属第一高等学校（通常課程・夜間課程）創設、開校

④

◀天六学舎で談笑する関西大学第一高等学校生

**1953**　［昭和28年］11月
・第一高等学校（昼間課程）、天六から千里山に移転

⑤

**1957**　［昭和32年］11月
・第一中学校、千里山に移転
一高・一中の一貫教育を開始

［昭和39年］10月
東京オリンピック

⑥

**1990**　［平成2年］4月
・制服をブレザーに変更

［平成元年］1月
新元号「平成」に
⑦

**1995**　［平成7年］4月
・第一中学校で男女共学が始まる

**2013**　［平成25年］11月
・第一高等学校・第一中学校100周年記念式典挙行

※①・②・④・⑤関西大学年史編纂室蔵。③・⑥・⑦毎日新聞社提供

# 文化祭でオリジナルのUSBメモリーを販売

## 高等部３年生が企画デザイン

◉関西大学高等部３年生
**松谷 果歩 さん　野口 夏希 さん**
**服部 紗弓 さん　坂本 奈津希 さん**

９月13と14日、高槻ミューズキャンパスで開催された関西大学中等部・高等部の文化祭に、今年は制服型のオリジナルUSBメモリーが販売され、人気を呼んだ。企業の協力を得て企画・販売を行ったのは、松谷果歩さん、野口夏希さんたち４人を中心にした高等部３年Ｂ組の有志だ。

合唱、演劇、クラブや教科の展示・発表、模擬店など、多彩な出展で大いににぎわった関西大学中等部・高等部の文化祭。３年Ｂ組有志は北館１階と東館12階で、高等部の制服姿のオリジナルUSBメモリーを販売し、完売するほどの成功を収めた。リーダーの松谷果歩さんと野口夏希さん、サブリーダーの服部紗弓さんと坂本奈津希さんを中心に約20人が、デザインや業者との価格交渉、当日の販売まで、すべて自分たちの力で行った。

販売したUSBメモリーは男子と女子の２バージョンあり、各８ギガバイトで１個1500円。デザインの可愛さと、上着の襟から前裾につながる白いステッチのラインといった細部まで再現した完成度の高さが、在校生や保護者に好評で、男子は即日完売、女子は男子より生産量を増やしたため２日目昼に完売した。

企画のスタートは７月。ヒントになったのは関西大学商学部の荒木孝治教授のゼミが山崎製パン株式会社と同社の人気商品「ランチパック」の新製品を共同開発したことだった。「商学部への進学を考えています。大学生からランチパックのプレゼンを聞いて、自分も企業とのコラボに挑戦してみたいと思いました」と松谷さんは話す。

松谷 果歩 さん

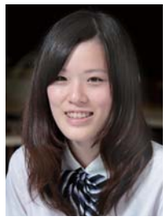
野口 夏希 さん

先生たちの紹介で、事務用品や卒業記念品製作を扱う企業の協力を得ることができ、デザイン、仕入れ値、数量を打ち合わせた。交渉役の中心を務めたのは野口さん。「できるだけ安く売りたくて、無理を言って底値で出してもらいました」

夏休みも明け、サンプルが上がってくると、休み時間も自然と文化祭の相談でクラスが盛り上がった。当日の販売は２箇所、しかも販売を担う生徒はそれぞれさまざまな予定がある。一人一人の都合を確認し、名前・担当・時間などが一目でわかるシフト表にまとめたのが服部さん。「得意な作業だから楽しかったです。高校１年生からエクセルの表作成は授業で習います。本校の生徒にとってはUSBメモリーは必需品です」と話す。

高等部３年Ｂ組の有志により企画・販売された制服型のオリジナルUSBメモリー▼

製品の出来上がりには自信があったが、赤字が出ないだけの数量を売ることができるか、事前の不安は大きかった。そこで、企業のアドバイスを参考に、２個セットで購入の場合は割引価格で販売するなど、販売方法も工夫して当日に備えた。


服部 紗弓 さん

坂本 奈津希 さん

そんな不安の中で、「絶対全部売る自信があった」と強気だったのが、当日の販売において巧みなセールストークで大活躍した坂本さん。「毎日受験勉強が中心の生活の中で、みんなで協力してできることが楽しかった。お客さんが商品を見て可愛いと言ってくれるのがうれしかった」と振り返る。

それぞれの個性を発揮して協力し、企業も巻き込んで、自分たちで考え実行するという貴重な体験は、彼女らにとって今後の大きな糧になるだろう。関西大学中等部・高等部の文化祭はまだ今年で４年目。３年Ｂ組の体験は次の学年へと受け継がれ、新たな伝統になっていく。



# 関西ジャズシーンを熱くする若手正統派

## 在学中からプロとして精力的にライブ活動

◉ジャズトランペット奏者
**横尾 昌二郎 さん** —社会学部 2007年卒業—

関西大学Jazz研究会は、ビバップ、ハードバップをコンボで演奏することが中心の音楽同好会。ここで腕を磨き、在学中から頭角を現したトランペット奏者・横尾昌二郎さんは、2009年には第３回神戸ネクストジャズ・コンペティション特別賞も受賞。正統派の若手プレイヤーとして注目を集めている。

関西大学千里山キャンパス誠之館３号館別館内にある会議室。ここが関西大学Jazz研究会のボックスだ。室内にはドラムセットやアップライトのピアノが置かれ、授業やアルバイトの合間などに部員が自由に顔を出し、自主的に練習に励み、時には居合わせたメンバーで即興のセッションを繰り広げる。このボックスで腕を磨き、関西のジャズシーンで活躍する卒業生も少なくない。

2007年卒業の横尾さんもその１人。「ジンジャーブレッドボーイズ」、「今西佑介セクステット」、「京都コンポーザーズジャズオーケストラ」などのバンドメンバーとして活動するほか、京阪神のジャズクラブを中心に、さまざまな演奏者と共演し精力的にライブを行う注目の若手正統派ジャズトランペット奏者だ。「大学時代が一番練習しました。クリフォード・ブラウン、リー・モーガン、マイルス・デイヴィスなど巨匠たちの音を聴いて採譜し、コピーする。何度も繰り返し練習すると、次第に自分の中に音が染みこんできて、セッション時に自然とその音が出るようになるのです」

本格的にジャズに触れたのは、中学のブラスバンド部。「押さえるところが３つしかないので簡単そうで、格好良かったから」という理由でトランペットを選んだ。高校は北陽高等学校へ進学。当然、ジャズバンド部に入部。練習に励む傍ら、中学３年から高校卒業まで、関西ジャズ界の雄「アローミュージックスクール」がプロデュースする「アローミュージックスクール」で学んだ。

中学や高校で親しんだのはビッグバンド形式のジャズだったが、関西大学Jazz研究会では少人数で即興性の高いコンボスタイルの演奏を始め、阪急北千里駅前でのJazz研究会ストリートライブ、他大学との共演やジャズパーティへの参加など、活動の幅を次第に広げていった。

転機になったのは大学３年次、Jazz研究会の先輩に誘われて、大阪・谷町９丁目のジャズクラブ「SUB」に出入りするようになったこと。「SUB」のオーナーは重鎮ベーシストの故・西山満さん。横尾さんが面識を得るようになった時には、西山さんはすでに70代だったが、孫ほど年齢が離れた若者との演奏を好み、横尾さんは西山さんとしばしば一緒のステージに立った。そして、ギャラはわずかだが、プロとしてステージに立つ機会も増えていった。

３年次といえば大学生は就職活動に奔走し始める時期。だが、横尾さんは、プロへの道を決意し、エントリーシート１枚すら書かなかった。「プロでやっていける自信があったわけではないけれど、もうしばらく音楽をやってみようと思った。自然な流れだったような気がします。しかし、卒業後３年ぐらいは悲惨な状況でしたね」

金銭的には恵まれなくても、演奏は楽しかった。面白そうなセッションがあると、スケジュールの許す限り顔を出す。それは今でも変わらない。やがて、横尾さんの実力が認められて、一緒にやろうと声が掛かるようになった。今では月に15本以上のライブをこなす売れっ子プレイヤーだ。また、ビッグバンドのアレンジを提供するなど、編曲家としても頭角を現している。

「できていないことを、毎日１つずつできるようになろうと決めて練習しています。これまでの演奏スタイルにとらわれず、変化していきたい。トランペットは、肉体との関係が深い楽器なので、肺を鍛えるなどフィジカルアプローチも行っています。自分の中で生まれてくる音を瞬時に表現し、場の空気を変えられるようなプレイヤーになりたいですね」。オーソドックスなハードバップをベースに、横尾さんは自分なりの新しい音の地平を切り拓こうとしている。

ライブ風景（横尾さん提供）

**横尾 昌二郎**
**——よこお しょうじろう**
■1984年（昭和59年）、兵庫県生まれ。2003年北陽高等学校、2007年関西大学社会学部卒業。ジャズトランペット奏者。在学中よりプロとしてライブ活動を開始。ジャズバンド「ジンジャーブレッドボーイズ」、「京都コンポーザーズジャズオーケストラ」などに参加。作曲、アレンジも手がける。

▲リリースされた CD

算数科教育の研究

# 子どもの知識と方略を引き出す具体物

インフォーマルな知識と合わさって理解促進

◉文学部
石井 康博 教授

50歳を過ぎて、大学の研究者となった石井康博教授は、それまでの長い年月を小学校の先生として過ごしてきた。さらにそのうちの13年間は大学院で学ぶ学生でもあった。学校現場の現実に即した行動観察を、研究の場で分析し、それをまた現場で確認・検証する。石井教授は実践的な研究で、算数における子ども達の生き生きとした学びを引き出す具体物の力について、独自の考察を深めてきた。

## ■小学校の教壇から大学の研究者へ

**――石井先生は長年、小学校の先生をされていたそうですね。**

教師として27年間、2年間は中学校でしたが、あとはずっと小学校で教えていました。小さな子ども達はこちらが思いもしないとっぴな反応や意外な表情を見せてくれるから教えていて面白かったです。教師を志望したきっかけは、大学のサークルで、夏休みに小学生と一緒に水泳大会や縁日などを楽しむ活動に参加したことです。そこで、子ども達に関わることに興味を覚えて小学校教師を目指しました。ところが、私の通っていた大学には初等教育科がなく、別の大学で教員免許資格を取りました。

**――そんな石井先生がどのような経緯で大学の研究者になられたのですか？**

初等・中等教育における指導方法を考える研修に参加したときのことです。事前に自分の算数の授業を録音し、分析していました。研修会でその分析結果が話題になり、私の授業では具体物を利用することで子ども達の自主的な発言が活発になっているという発言が講師からありました。そこから、具体物の使い方に関心を持つようになり、教師を続けながら夜間でも授業が受けられる大学院へ通うことにしました。

結局、修士課程を修了するのに7年。さらに博士課程は別の大学院で6年間もの長い間ご指導いただきました。指導教官には、働きながら学び、学んだことを実際に自分の職場で実践・検証するという私のような研究スタイルは珍しいと言われました。博士（人間科学）の学位は2012年に受けました。その時の論文を加筆し、関西大学出版部から『小学校算数科で利用されてきた具体物』として出版してもらいました。

「小学校算数科で利用されてきた具体物」
石井康博 著
関西大学出版部（2013年）

## ■具体物が子どもの“わかる”を助ける

**――“具体物”とはどのようなものを指すのですか？**

例えばブロック、タイル、おはじきなど、算数セットに入っているものや鉛筆、碁石、実物をまねて色紙で作ったお金や食べ物など、手で扱うことができるもののことです。教科書に描かれた絵や図も具体物に含めて考えてよいと私は思っています。

小学校の算数では具体物を利用することで子ども達が「わかる場面」を作ることができるとされています。しかし、具体物を使えば、子どもは必ずわかるというわけでもなく、子どもによって、あるいは状況によって、かえって混乱することもあります。子どもは教師が思っているように具体物を使わず、意図したように学ばないことも含めて、具体物を使った教授法について改めて見直したいというのが、私が博士課程まで学ぼうとした動機でした。

**――子ども達は具体物を使って、どのように“わかる”体験をするのですか？**

小学校入学前の家庭、学校、保育園、幼稚園での体験で得られた知識を「インフォーマルな知識」と呼びます。具体物は子どもの持っているインフォーマルな知識を引き出す働きがあり、子どもは具体物と自分のインフォーマルな知識を合わせて、「こうやって解決しよう」という方略を考え出します。

例えば、1つの物を等分するという数的活動であれば、紙で作ったピザという具体物を使った時に、等分の概念がうまく飲み込めていなかった子どもに効果があったということが、私の教えていた授業でもありました。ピザは家庭で食べたことがあるだろうし、その際に「4人で分けなさい」と言われたら、子どもは何も教わらなくても同じ大きさに切り分けていたと思います。そのインフォーマルな知識がピザをまねた具体物で引き出され、紙のピザを半分に折って、それをまた半分に折って切ると同じ大きさになるといった方略を子どもは導き出します。

算数で子どもにとって理解が難しい内容として「分数」が挙げられますが、分数は基本的に全体をいくつかに等分割することで引き出される数です。身近な具体物を利用することで、分数の基礎になる等分割という概念を理解することに、インフォーマルな知識が活用されたのです。

**――子どもは具体物を想定外の方法で扱うこともあるのでは？**

おはじきを10個並べて数えさせようとすると、一列に並べるのではなく、花の形にきれいに並べる子どもがいました。若い頃の私だったら「今は横に並べるんだよ」と注意してしまったでしょう。でも、その子どもは花びらが5枚のお花が2つだから、10個とちゃんと数えるんですよ。

低学年の子どもは特に、遊びながら学びます。だから、教師も遊びを大事にして子どもの学びをみなければいけません。そのことを私は子ども達に教わりました。

算数の教科書は、実物ではなく、数字で計算ができるように早くしたいという編集意図を感じます、しかし、1年生の「数える」などは、具体物を使ったり、図を描いたり、いろいろな方法を体験させてあげることにもっと時間をかけてもよいのでは、と思います。

## ■教える力を大学の間に付けさせたい

**――大学教授になって新たに関心を持っている研究テーマなどはありますか？**

私が担当している講義の1つに「算数科教育法」があります。授業期間の前半は理論や算数の内容に、後半は学生が生徒役と先生役に分かれて行う模擬授業に重点を置く計画で進めています。

模擬授業に入ると、学生はどうしても「板書はどうしよう」など、実践的な授業の手法に関心が集中してしまいます。前半で学んだ算数科の内容を反芻しながら、学生が自分で指導案まで考える模擬授業のやり方を工夫できないかと、今考えています。子どもに教える力を大学生の間に身に付けられるような模擬授業の形を作りたいと思います。

**――学生達は良い先生になりそうですか？**

初等教育学専修は小学校教員養成を目指す専修ですから、学生には全員、小学校の教師になってほしいと願っています。学生は学校現場で上手くやるにはどうすればいいのかという心配をしがちです。実際、私も教師時代は指導方針で悩んだこともありました。うまくいかずに悩むことも教師の醍醐味なのだということは伝えていきたいです。

学生達はきっと良い先生になると思います。「君たちは今のままでやっていけばよい」と常に私は言っています。技術的には先輩のようなことはできなくても、子どもは若く、前向きな先生が大好きです。課題は多く、たくさんの苦労も経験せざるを得ないかもしれませんが、若さを武器に臆することなく、自信を持ってチャレンジしてほしいです。新卒の若い先生が担任になると、子ども達は「やったー」と大騒ぎしますから。

児童の保護者は若い先生の経験不足を心配するかもしれません。そのためにも、保護者役と先生役に分かれて行う模擬保護者会を私の講義で取り入れています。学生の時から、私の教育方針はこうだというものをもって、自分が担任を持ったらこんなクラスにしたいということを視野に入れて、それぞれの持ち前のいいところを発揮して頑張ってほしいですね。

教育実習中の様子

学生がそれぞれ保護者役と先生役に分かれて行う「模擬保護者会」

■研究最前線

バイオマスの有効利用の研究

# 農工商が連携する新しい六次産業を創出

## 地域資源を利用したバイオリファイナリーの基盤形成

◉化学生命工学部 生命・生物工学科
片倉 啓雄 教授

文部科学省が重点的かつ総合的に補助を行う平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に、化学生命工学部の片倉啓雄教授が代表を務めるプロジェクトが採択された。地域の一次産業を活性化、バイオマスの有効利用のモデルとなる研究基盤をつくるプロジェクトだ。

◀「安全倫理―あなたと社会の安全・安心を実現するために」
片倉啓雄・堀田源治 著／培風館（2008年）
「バイオ系実験安全オリエンテーション」
片倉啓雄・山本仁 著／東京化学同人（2009年）

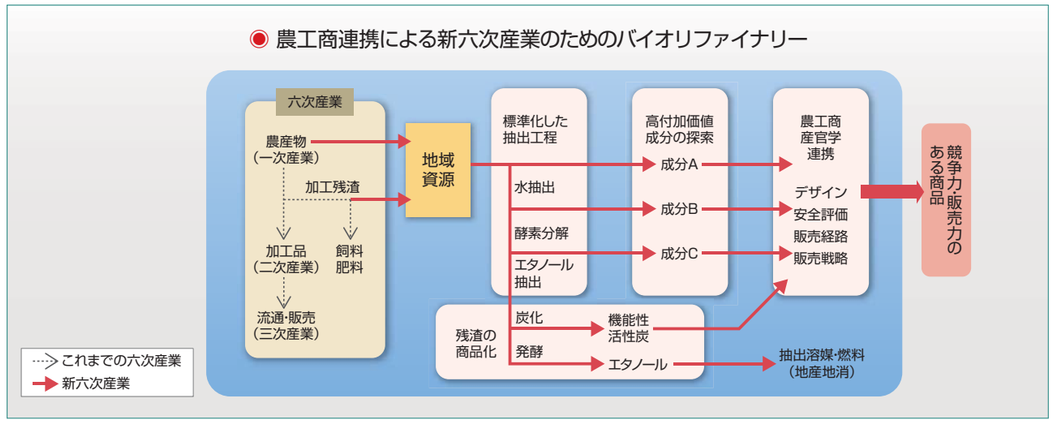
### ■文理融合、産官学連携の研究体制を構築

**――「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択されたプロジェクトはどのようなものですか？**

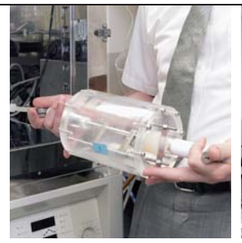
「地域資源の高度利用を図るバイオリファイナリーの基盤形成とその実用化」というタイトルで、まず、地域で生産される農産物資源から、付加価値の高い成分を探索・抽出・精製し、商品化します。さらに、その残渣からバイオ燃料や炭などを生産し、バイオマスの有効利用を図ります。地域密着型で原料を余すことなく活用するバイオリファイナリーの研究基盤を確立しようとするプロジェクトです。

**――具体的には、どのような取り組みをされるのですか？**

まず、規格外品や傷があり流通に乗らない農産物や加工時の廃棄物などを集めて、いろいろな成分を抽出します。抽出した成分は、企業や大学の研究者が自由に使える試料として広く提供する仕組みを作ります。付加価値の高い成分が見つかり、その用途が開発されれば、生産者は自分の農産物や加工残渣を用いて新たな事業を展開できるようになります。有用物質を抽出した後の残渣からは、調湿性などの機能を持った炭やバイオエタノールを製造します。このような一連の研究開発がスムーズに行える枠組みを整えることがプロジェクトの目的です。




# Biorefinery



**――生産者は高付加価素材を利用して、どのように事業化するのですか？**

例えば、アンチエイジング（老化抑制）効果があり、化粧品に使えそうだとなれば、抽出・濃縮した成分を大手メーカーや専門商社に販売することができるでしょう。近年、農業分野では六次産業化や農工商連携が推奨されています。六次産業とは、第一次産業（生産）、第二次産業（加工）、第三次産業（流通・販売）の一体化を促進し、地域に新たな食農ビジネスを創出しようとする取り組みです。しかし、現状では、例えばジャムなどのように調理したものを小売りする程度で、農産物の新しい機能や効能を解明し、付加価値の高い新製品を作り出す事例はほとんどありません。農産物や加工残渣に含まれる成分やその機能を調べたくても、どこに頼めばいいのか分からない生産者が今は大多数だと思います。その問題を解消し、さらに企業とのマッチング、製品パッケージのデザイン、販売店の開拓までサポートして、新しい六次産業のモデルを作りたいと考えています。

**――プロジェクトにはどのような方が参画されるのですか？**

関西大学の教員を中心に、学外の研究機関、京阪神の自治体、農業法人、食品機械メーカーや運輸会社、製茶組合など多彩な法人・個人にご参加・ご協力いただいています。特に、理工系の研究者のほか、社会科学系の先生方にも参加していただいていることは、このプロジェクトの大きな特徴です。社会学部心理学専攻の池内裕美教授には、消費者心理を考慮した商品デザインや販売戦略でご協力いただきます。30年間で5000社以上の中小企業を訪ね歩いた経験をお持ちの大西正曹名誉教授には、企業の紹介・交渉・調整などで大きな力になっていただいています。

### ■採算性の高いバイオエタノール製造技術を開発

**――このプロジェクトの中で、片倉教授の役割は？**

全体の構想を描き、協力いただく生産者、研究者、企業の間をつないで調整するコーディネーター的な役割をしようと思っています。また、残渣からのバイオエタノール生産は、私が研究開発したシステムを利用します。最後の残り物の処理において、いよいよ研究者としての私の出番になるということです。

**――それは、どのようなシステムですか？**

バイオマスからエタノールを生成する従来の工程は、原料に水を加えて発酵させ、エタノールを蒸留回収したときに大量の水を排出します。わざわざ水を加えて、後でまた水を取り除くわけです。廃水処理にも当然多くの経費がかかるわけですから、できるならば、最初から水を入れない方が効率的ですよね。

私が開発した固体連続併行複発酵（CCSSF）システムは、糖の分解と発酵を１つの槽で同時に行い、連続的にエタノールを回収するもので、糖化酵素、水が少量で済む省エネルギー低コストのシステムです。2010年度から3年間、環境省の地球温暖化対策技術開発等事業の委託を受けて実験装置を製作し、食品廃棄物などからエタノール製造を試み、パイロットスケールではこの条件下ならばこの程度の収率が期待できるという検証は終わっています。

固体連続併行複発酵（CCSSF）システム

そもそも、今回のプロジェクトもバイオエタノールの研究がきっかけでした。日本でのバイオエタノールの生産はどう逆立ちしても採算が合いません。バイオマスの運送に大きなエネルギーを消費し、コストもかかってしまうからです。できるだけ運ぶ距離が短くなるように生産拠点を起点とした地域分散型にすると、今度は１カ所の生産量が少なくなり、固定費が上がってしまいます。そこで解決策として私が考えたのは、バイオマスからエタノールだけを作るのではなく、他の付加価値のある物も作ることによって、収集・運搬、圧縮、脱水のコストを下げることでした。このアイデアが今回のプロジェクトにつながっています。

### ■「WHY」を問い、「HOW」を考える

**――これまでどのような研究をされてきたのですか？**

私の専門分野は微生物工学で、乳酸菌、酵母などの微生物をはじめとする生物の機能を上手に使って産業に結び付ける研究をしてきました。学生時代の、微生物の培養や酵素の精製から始まり、就職した製パン用イーストメーカーの研究所では、酵母の培養において収率を高めるにはどうすればよいかを研究したり、イースト菌の交雑育種をしたり、1つのテーマにじっくりと取り組むというよりは、いろいろなことに手を出してきました。何にでも興味を持ってしまう性格なんです。おかげで、関連の薄いと思われていることでも、ここととここがつながれば面白い成果が生まれるといったひらめきはあると思っています。

**――このプロジェクトは各方面に影響を与えそうですね。**

農産物などに含まれる未利用な成分に関する学術研究、地域の農工商の連携、農業生産者が加工・販売まで行う六次産業化などを加速させることができればいいですね。また、次の世代の研究者、技術者を育てる機会にもなれば、とも思います。そのために、博士課程の大学院生にリサーチアシスタントとして参加してもらい、基礎研究を実際に社会に応用していく考え方と実行のプロセスを身近に体験してもらおうと考えています。

**――教育者として学生達に特に心掛けるように指導されていることはありますか？**

何のためにその研究をやるのかを見失い、研究のための研究になってしまうことがないようにと常に言っています。このプロジェクトについても、学術的な興味だけでなく、どうすれば産業化できるのかということを常に考えてきました。理学部と工学部の違いを考えると、理学部は「なぜ」に軸足を置き、工学部は「どうやって」に軸足を置き研究すると言われています。どちらを選んでも良いが、どちらかだけの研究はしない方が良いと話しています。「なぜ」だけでは自己満足に終わってしまいますし、「どうやって」ばかりで「なぜ」を考えないで試行するのは愚かなことだからです。目的を考えた上で試すのが真の科学者だと言えるでしょう。

# Topics ■トピックス［学内情報］

関西大学第一高等学校・第一中学校100周年記念式典・祝賀会挙行

## 次なる時代に向けて躍進する

関西大学第一高等学校・第一中学校は今年、記念すべき創立100周年を迎えた。前身である関西甲種商業学校が「商都大阪にふさわしい若い商業人を育てること」を目的に創立されたのは1913（大正2）年。両校はその長い歴史の中で「清い精神と高い気品」「自由溌剌なる精神」の校風を築き上げ、これまでに2万8000人以上の生徒を社会に送り出してきた。

創立100周年の節目を迎えるにあたり、11月2日、なみはやドーム（大阪府立門真スポーツセンター）・メインアリーナにて記念式典が執り行われた。第1部では、あいさつや祝辞、祝電披露などが行われ、橋本定樹第一高等学校・第一中学校校長は「『START FOR NEXT』次の100年も生徒達と共に成長し続ける第一中学校・第一高等学校でありたい」と式辞を述べ、100周年を機に更なる発展を誓った。続く第2部では、吹奏楽部による演奏やカイザー部チアリーディングの演舞が披露されたほか、サプライズゲストとして、卒業生でお笑い芸人のジャルジャル（後藤淳平さん、福徳秀介さん）が登場し、場内は大いに盛り上がった。その後、ホテルニューオータニ大阪・鳳凰の間にて祝賀会も開催され、鏡開きの後、来場者の懇親が図られた。

当日、式典には来賓、卒業生、保護者、生徒、教職員ら約4000人、祝賀会には約400人が参加し、盛大な会となった。

橋本定樹校長の式辞

なみはやドーム・メインアリーナで行われた記念式典の様子

◉ マスコットの紹介

「カイザー関大」から皇帝ペンギンを連想してマスコット化しました。
顔の模様が「100」になっています。
体の色はスクールカラーの紫紺です。

Since 1913
KANSAI UNIV. DAI-ICHI

大阪教育大学、近畿大学と連絡協議会を発足

## 国私立の垣根を越えた連合教職大学院設置に向けて

8月6日、関西大学は大阪教育大学及び近畿大学と共同して2015年4月に「連合教職大学院」を設置することを目指し、検討を開始することを発表、同日3大学の学長による連絡協議会を発足、共同記者会見を行った。国立大学と私立大学が共同して教職大学院を設置するのは、京都の8大学の連合による京都教育大学連合教職大学院に次いで全国で2例目。

大阪教育大学天王寺キャンパスに、教員免許取得の学部卒学生と現職教員を対象とするコースを設定、定員は30人となる見込み。既存とは異なる新しい教職大学院において、高度な専門的能力及び優れた資質を有する教員の養成を行うことを目的としています。

◀「連合教職大学院」設置を目指し、発足した連絡協議会での共同記者会見の様子

## 本学が申請した経営・研究戦略に基づく4件のプロジェクトが文部科学省平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択

文部科学省が重点的かつ総合的に補助を行う平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に、本学より申請した4つのプロジェクト「国際的な文化財活用方法の総合的研究」「コンピュータホログラフィ技術を中心とした超大規模データ処理指向コミュニケーション」「地域資源の高度利用を図るバイオリファイナリーの基盤形成とその実用化」「次世代ベンチトップ型シーケンサーによるゲノム・エピゲノム解析に基づく統合的健康生命研究」が採択された。本事業は平成19年度で新規募集を終了した高度化推進事業の後継事業として発足され、大学の経営戦略や研究戦略に基づき、各大学が特色を活かした研究を実施するために、国がその研究基盤の形成を支援するもの。募集は「研究拠点を形成する研究」「大学の特色を活かした研究」「地域に根差した研究」の3つの研究観点で行われ、本学からはこれまでに19プロジェクトが「研究拠点を形成する研究」として選定された。これは全国第1位の実績を誇る。

▼文部科学省・平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択された4つのプロジェクト

| ・研究組織名 | ・研究代表者（申請時） | ・研究プロジェクト名 |
|---|---|---|
| 国際文化財・文化研究センター | 文学研究科 教授 吹田浩 | 国際的な文化財活用方法の総合的研究 |
| ホログラフィ技術ユニット | 先端科学技術推進機構<br>システム理工学部 教授 松島恭治 | コンピュータホログラフィ技術を中心とした超大規模データ処理指向コミュニケーション |
| 地域密着型バイオリファイナリーユニット | 先端科学技術推進機構<br>化学生命工学部 教授 片倉啓雄 | 地域資源の高度利用を図るバイオリファイナリーの基盤形成とその実用化 |
| ゲノム・エピゲノム研究ユニット | 先端科学技術推進機構<br>理工学研究科 教授 老川典夫 | 次世代ベンチトップ型シーケンサーによるゲノム・エピゲノム解析に基づく統合的健康生命研究 |

第36回関西大学統一学園祭を開催

## 「Jump out! 関彩大!!」

2013年度の関西大学統一学園祭が、11月1日から4日まで、千里山キャンパスで開催された。今年のテーマは「Jump out! 関彩大!!」。これは約3万人の関大生が持つ個性（＝色）とそれらに「彩られた」関西大学を千里山キャンパスだけにとどまらず、外の世界に向けて発信する（＝飛び出す）という学外交流への強い意気込みが込められたもの。

今年も、多くのサークル及びゼミによる模擬店やフリーマーケットをはじめ、研究発表やステージ企画、著名人による講演会等、さまざまな企画や催しでにぎわいを見せたほか、11月3日には、℃-uteやポール・バラードを迎えてライブを開演し、会場は大いに盛り上がった。さらに2日、3日には、関西大学と連携している自治体・団体が「地域の魅力アピールコーナー」を設置。出展した自治体は岩手県大槌町、大阪府池田市、大阪市北区、堺市、吹田市、高槻市、八尾市、京都府城陽市、奈良県明日香村、葛城市、兵庫県淡路市、加西市、丹波市、福井県、天神橋筋商店連合会、道頓堀商店会（一部は1日のみの出展）で、地元特産品の販売や観光パンフレットの配布を実施した。また、4日の夕刻には、悠久の庭で盛大な「後夜祭」が開催され、フィナーレを迎えた。

1 祭りダンスサークル「漢舞」の演舞
2・3 盛り上がったステージ企画
4・5 地元特産物の販売でにぎわった「地域の魅力アピールコーナー」

◉第4回Japan Weekを開催

# EU諸国とともに日本のメディア文化を考える

国際シンポジウム「日本メディア文化～グローバル化とガラパゴス化の狭間で」

開会式で挨拶をする吉田栄司国際部長

ワークショップでの発表報告会

映画上映の様子

日本拳法部の演武と実戦

関西大学日本・EU研究センターでは毎年、ベルギー・ルーヴェン大学において国際シンポジウムを実施するとともに、隔年で「Japan Week」を開催している。本年度は第4回目にあたり、11月5日から7日の3日間にわたってセレモニーや学生交流イベント、国際シンポジウム等のプログラムを実施した。

国際シンポジウムは「日本メディア文化～グローバル化とガラパゴス化の狭間で」と題し、内向きでガラパゴス化しているとも言われている日本社会が、国外で発見された“日本らしさ”をもとにグローバル化し、新たな“日本らしさ”を構築しつつある事態について、活発な議論が展開された。続くワークショップも、同テーマで本学およびルーヴェン大学の大学院生らが発表報告会を実施した。

オープニングセレモニーと学生交流イベントでは体育会日本拳法部が演武と実戦を披露し、“ヨーロッパ人から見た日本人”を意識した渾身のパフォーマンスに感嘆の声が上がった。また、本学学生が制作した映画『マイホーム』をはじめとする「地方の時代」映像祭入選作品3作を上映。ルーヴェンとその近隣都市の市民、ルーヴェン大学の学生や教職員等が多数参加し、盛大なイベントとなった。

第1回国際交流フェスティバル「せんぱく」を開催

# 多文化・多世代共存で、北摂地域を活性化する

20以上のブースが並んだ「せんぱく」会場

交流・体験ゾーンでは来場者が世界の文化を楽しんだ

関西大学・大阪大学連携による文部科学省委託事業「H.O.M.E.（Harmonic Osaka Multicultural Environs）千里交流拠点」では、留学生に対する就職支援や宿舎支援、交流支援を行い、留学生の力を生かした街づくりに取り組んでいる。その一環として、10月20日、昨年で誕生50周年を迎えた千里ニュータウンの活性化を目的とする住民参加型の国際交流フェスティバル「千里万国博覧会（通称：せんぱく）」が、関西大学南千里国際プラザ南広場において初めて開催された。

当日は、留学生や日本人学生、地域住民、在日外国人によるステージショーが行われ、ダンスや楽器演奏等、各国の伝統文化を披露。本学の応援団リーダー部とバトン・チアリーダー部がオープニングを飾り、会場を大いに盛り上げた。また、交流・体験ゾーンには各国料理の販売や異文化紹介、異文化体験のブースが20以上並び、来場者はさまざまな国のお茶やお菓子を味わい、民族衣装の試着や工芸品作り、世界の遊び等を楽しんだ。

大規模避難訓練を今年も実施

# 関大防災Day2013 ―広がれ！みんなの安全・安心！―

日本赤十字社大阪府支部・木村弘之救護係長を迎えて開催された防災講演会

関西大学では、毎年秋に各キャンパスで「関大防災Day」を実施している。今回は10月17日、千里山・高槻・堺の3キャンパスで同時に開催され、学生・教職員ら約1万人が、地震避難訓練および安否確認訓練に参加した。

千里山キャンパスでは防災講演会も開催され、日本赤十字社大阪府支部の木村弘之救護係長が「救護活動時の現実」をテーマに講演。赤十字の活動紹介や国際救援など、命を救う活動の現実と課題について語った。

（左）地震避難訓練の様子／（右）安否確認シートに書き込む学生

さらに千里山キャンパスでは、近隣連合自治会をはじめとする地域住民の方々と一緒に行う炊出し訓練や、煙体験、避難器具体験、消火器使用・消火栓放水体験、日本赤十字社の協力による応急処置等簡易体験、水害時避難訓練、防災啓発ブースの設置なども実施され、災害に対する意識をさらに高める一日となった。

また、高槻ミューズキャンパスでは、初等部・中等部・高等部を含めた避難訓練を11月11日に実施した。

◉関西大学協賛の「第3回大阪マラソン2013」開催

# 関大生のボランティアが活躍

OSAKA MARATHON 2013

1・2　チームワークで対応した給水ボランティア
3・4 大会を盛り上げたダブルダッチ「Mix Package」とJazz研究会／5 チャリティ募金ボランティア／6 声援を送る応援団の学生達

10月27日、今年で3回目となる「大阪マラソン2013」（大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催）が開催された。沿道には125万人が詰めかけ、15万1410人の応募より選出された3万人あまりのランナーに声援を送った。

関西大学は第1回目から協賛団体として大会運営に協力し、地元「大阪」を盛り上げるためにさまざまな形で貢献してきた。今大会も給水ボランティアとして420人の学生が5㎞地点の給水所を担当。ランナーが給水カップを確実に受け取れるよう万全の態勢で臨み、抜群のチームワークで対応した。

沿道では応援団バトン・チアリーダー部などの学生が声援を送り、ダンスサークル「Belly Divas」やダブルダッチ「Mix Package」、Jazz研究会などが大会を盛り上げたほか、総合案内所では英語と中国語に精通した合計16人の語学対応ボランティアが外国人ランナーらの問い合わせに対応。昨年に続き、チャリティ募金ボランティア活動も行い、チャリティマラソンという大会精神のアピールにも貢献した。沿道から熱い声援を受けた関西大学特別枠で参加したランナー18人は、本学オリジナルウエアを着用し力走した。

また、大会直前の25、26日にインテックス大阪で開かれた「大阪マラソンEXPO2013」では、人間健康学部の教員・学生らが“インターバル速歩”を紹介し、来場者に好評を博した。

# KANDAI NEWS
## ■関大ニュース

### 大学生観光まちづくりコンテスト2013 商学部の石﨑和希さんがパフォーマンス特別賞受賞

「泉佐野市の地域再生」をテーマに行われたプレゼンテーション

「パフォーマンス特別賞」を受賞（写真右が石﨑さん）

9月18日、「大学生観光まちづくりコンテスト2013」の西日本ステージにおいて、石﨑和希さん（商4）がリーダーを務める「京都すばるOB」が発表した「泉佐野市観光村構想計画」がパフォーマンス特別賞を受賞した。このコンテストは観光まちづくりを通じた地域活性化プランを競うもので観光庁等が後援、本年度は「訪日外国人向け観光まちづくりプラン」をテーマに東・西日本の2ステージで開催。全国より185チーム、1010人の大学生がエントリーした。

「京都すばるOB」は本学の石﨑さんと高校時代の同級生2人のチーム。TV番組で高校生が地域活性化に取り組む姿を見て、「負けられない」と応募し、財政健全化を目指している泉佐野市を再生するため、関西国際空港のある立地を生かした観光村の建設を提案した。石﨑さんは「これまでにKUBIC等に参加して培った商学部でのスキルを生かすことができたと思います。受賞後、泉佐野市役所の方々から意見交換の場を作りたいという申し出を頂きました。私達のプランが少しでも役に立てばうれしいです」と語った。

### 平成25年度女子57回全日本学生テニス選手権大会で 体育会テニス部の藤原悠里さんが優勝

優勝を果たした藤原さん（写真提供：関大スポーツ編集局）

8月19日、21日から27日に岐阜県・岐阜メモリアルセンターで開催された平成25年度女子57回全日本学生テニス選手権大会において、体育会テニス部の女子主将・藤原悠里さん（人4）が、女子シングルスで見事、優勝を果たした。これは、体育会テニス部創部93年目にして初の快挙。藤原さん自身にとっても初の大会制覇となった。

また、10月23日から31日まで行われた、全日本大学対抗テニス王座決定試合に創部初となる男女揃っての出場を果たし、男女共に4位と健闘した。

### 第65回全日本大学準硬式野球選手権大会で 体育会準硬式野球部が創部以来初の全国優勝

8月22日から27日まで東京都・昭島市民球場、八王子市民球場、立川公園野球場、上柚木公園野球場で開催された文部科学大臣杯第65回全日本大学準硬式野球選手権大会において、体育会準硬式野球部が創部以来初となる全国優勝を果たした。

準決勝では大会3連覇を目指す強豪・中央大学を2対1で制し、決勝では甲南大学と対戦。2対2の同点で迎えた最終回で勝ち越しに成功し、4対2で勝利を収めた。

全国優勝を決めた体育会準硬式野球部（写真提供：関大スポーツ編集局）

### リクルート「進学ブランド力調査2013」で、 本学が関西エリアの「志願したい大学」第1位に

株式会社リクルートが実施した「進学ブランド力調査2013 高校生に聞いた大学ブランドランキング2013」において、関西大学が関西エリアの「志願したい大学ランキング」で第1位となった。この調査は、関東・東海・関西エリアの高校に通っている2014年3月卒業予定者7万4000人を対象として実施されたもの。関西エリアの調査対象大学250校のなかで、本学は6年連続して第1位を獲得した。

### 創立130周年記念事業キャッチコピー・シンボルマークを選定

2016年に本学が創立130周年を迎えるにあたり、キャッチコピーとシンボルマークを本学関係者に広く募集し、キャッチコピー922点、シンボルマーク178点の応募があった。

本学学生による人気投票も参考に厳正な審査を行った結果、以下のとおり最優秀作品を選定した。今後、一部修正を加える場合があるが、記念事業を推進していくために広く活用される。

◉ キャッチコピー

「この伝統を、超える未来を。（関西大学130周年）」

受賞者名　山本高史さん（教職員）

◉ シンボルマーク

130th KANSAI UNIVERSITY

受賞者名　水出幸輝さん（社会学研究科博士課程前期課程1年次生）

〈審査委員長コメント〉

キャッチコピーは、130年の伝統への自信と、未来への変革の決意を端的に表現し、群を抜いていると高く評価された。シンボルマークは、関大の象徴である「葦の葉」と紫紺カラーをシンプルにデザイン化し、未来に向けて発展する力強さを表現した点が高く評価された。

両作品が組み合わされて使用されると、より力強く洗練された関西大学のイメージを社会に伝えることができるだろうというのが審査委員会の一致した意見である。

Read KANSAI UNIVERSITY NEWS LETTER
No.35 November, 2013
発行日・2013年（平成25年）11月25日
発行・関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 TEL 06-6368-1121
http://www.kansai-u.ac.jp/

OSAKA MARATHON 2013
関西大学は大阪マラソン2013のオフィシャルスポンサーです。

関西大学